

■宮島誠一郎 米沢藩周旋方として活躍，維新後もその外交能力活かして薩摩閥と長く親交を保ち、藩の汚名雪ぎに尽力。
みやじませいいちろう
適塾わづン・ 1838＝ 米沢藩中級武士の右筆宮島一郎左衛門吉利の長男に生まれる。母は田滝甚蔵の娘宇乃。幼名熊蔵。

天保改革弾圧1842＝ 4歳：唐詩を誦んじて神童と目され、

阿部正弘首座1845＝ 7歳：

・・・・・・1847＝ 9歳：この頃，藩校興譲館に入り，経書・史書を学ぶ。

万次郎帰国・ 1852＝14歳：この頃，同藩の砲術家浅間厚齋に入門し，砲術を学ぶ。
ペリー来航・ 1853＝15歳：「ペリー来航により同藩内に編成された抜隊龍隊(battalion)に編入され，軍制改革に関わる。当世流行の攘夷派思想に染まることはなく，むしろ武備を整えて諸外国に対峙すべきであるとの考えであった。

松下村塾・ ・ 1856＝18歳：

桜田門外変・ 1860＝22歳：

8月18日政変 1863＝25歳：*将軍徳川家茂が家光以来200年ぶりの上洛を余儀なくされた際，米沢藩が随伴を申し出，父の随員の資格で参加。京都で漢詩人や書家と交流。藩主上杉斉憲が孝明天皇の攘夷親征と大和行幸の是非を諮問される事態となり，「公武一和」「攘夷不可」を建議した直後の政変で長州系尊攘派は京都から一掃され，薩摩藩とともに政変を主導した会津藩の公用方秋月悌次郎らと接触・交流し，名が知られるようになる。

禁門の変・ ・ 1864＝26歳：願い出て東北諸藩探索の旅に出，各藩の情勢を詳細に家老へ報告。
薩摩藩士密航1865＝27歳：
藩長同盟・ ・ 1866＝28歳：藩校興譲館の改革案を提出。周旋方として江戸出府の命を受け，江戸藩邸で情報収集に努める。京都へ赴いて茂憲の帰藩を推進，会津藩士林三郎と蝦夷地開拓を幕府目付に相談するなど，藩力養成方策を探る。

大政奉還・ ・ 1867＝29歳：父の隠居で家督を継承。大政奉還で米沢藩は混乱。徳川慶喜の辞官納地が決定されると，旧幕府側の兵が激昂。米沢藩も至急藩兵を大坂へ上らせるが，

明治維新・ ・ 1868＝30歳：*その途鳥羽・伏見の戦いでの徳川軍の敗走を聞くや，藩主斉憲が慌てて反転し帰国。在京米沢藩幹部の動きとは別に，会津藩の謝罪降伏で戦争を回避する方策を探り，奔走。長州藩の広沢真臣と面会して好感触を得て，帰国。藩主斉憲自らも出向いていた奥羽列藩会議開催中の白石城に派遣され，広沢の見解を伝えて謝罪降伏路線で説得に努め，奥羽諸藩は朝廷へ直接建白を行う方針で白石盟約書を調印。仙台藩儒者大槻磐溪起草による建白書は過激だったため，これを改削して表現を改め，米沢藩主導の穏健路線を推進。奥羽列藩同盟が結ばれた。建白書提出の副使として江戸へ向かうが，すでに手遅れで奥羽諸藩は戦争に卷込まれる。宮島はむしろ率先して米沢藩が奥羽諸藩の罪をかぶると申し出(「奥羽有罪在一身」)建白書とともに新政府に提出。その結果，庄内藩と並ぶ寛大な処置がなされた。以後，藩の賊軍の汚名を雪ぐことに尽力。

戊辰戦争終・ 1869＝31歳：版籍奉還後は，米沢藩の藩政改革に尽力。
初の日刊新聞1870＝32歳：太政官待詔院下局に出仕。
廃藩置県・ ・ 1871＝33歳：立法諮問機関である左院の議員となる。
学問のすすめ1872＝34歳：左院議長後藤象二郎に対し「立国意識」を提出し，過度に権力が集中する大蔵省の勢威を分散させるため，内務省の設立も建言したが，左院副議長の江藤新平の反対で却下される。江藤が司法卿として転出すると，「国会議院手続取調」を提出するも黙殺される。

明治6年政変 1873＝35歳：再び「国会院」設立に奔走するも，征韓論争などで立ち消えに。
佐賀の乱・ ・ 1874＝36歳：台湾出兵に関しては，主導して反対の建白書を提出。
初の民間工場1875＝37歳：斉憲の参内・明治天皇拝謁までこぎ着けたが，官位については却下された。
三つの反乱・ 1876＝38歳：修史館御用掛の時，大久保利通と斉憲の会見を実現，
西南戦争・ ・ 1877＝39歳：初代清国公使何如璋が来日すると，頻繁に訪問し筆談で交流，互いに漢詩人として意気投合。私交に徹しながらも，筆談録は大久保や明治天皇にも提出され，裏面工作員の役割も果たす。

大久保暗殺・ 1878＝40歳：大久保利通・何如璋が計画し，元米沢藩士の海軍中尉曾根俊虎が中心となって組織した振亜会への参加を促され，振亜会を母体とする興亜会設立・運営に関与するが，琉球処分が行われ，日清両国は対立。苦情言いに来た公使館員沈文?らとの対話から，ちょうど日本滞在中だった元米国大統領グラントが仲介を試みようとしていることを知り，岩倉具視右大臣に報告。琉球問題について有利な妥協案を引出すことに成功。

沖縄県編入・ 1879＝41歳：宮内省御用掛兼務を命ぜられ，帝室典範作成に向けた調査を岩倉右大臣から依頼される。この時期，日本研究のために滞在中で宮島と親交のあった黄遵憲も，宮島から日本の礼式祭典について詳細に尋ね，帰国後の名著「日本国志」執筆の一助としている。

・・・・・・1880＝42歳：ついに上杉斉憲が従四位に復位し，幕末以来の米沢藩の雪辱が果たされた。盛り上がる国会開設運動を憂慮していた岩倉に，かつての国憲編纂の事績を語って，まとめるよう依頼され，

明治14年政変1881＝43歳：「国憲編纂起原」として提出。明治初期の議会制研究の上で重要な資料となる。
新体詩抄・ ・ 1882＝44歳：参議伊藤博文が憲法研究のためヨーロッパへ赴いた際には，送別宴に出席。
岩倉具視没・ 1883＝45歳：帰国した伊藤博文に意見書を提出するが憲法制定に参加することはできなかった。その後，参事院議官補，宮内省華族局，爵位局主事を歴任。

帝国憲法発布1889＝51歳：*ついに斉憲が戊辰戦争前の従三位に昇進(直後に死去)，上杉家から謝儀として金35円を贈られた。
大本教・ ・ 1892＝54歳：
日清戦争始・ 1894＝56歳：
白馬会・ ・ 1896＝58歳：貴族院議員に任命された。
子規句歌革新1898＝60歳：なかなか実現せずに懸案であった最後の将軍徳川慶喜の明治天皇拝謁の実現にも寄与して，
田中正造直訴1901＝63歳：
日露戦争終・ 1905＝67歳：
韓国併合・ ・ 1910＝72歳：
大逆事件判決1911＝73歳：没した。
維新後は，自ら築いた人脈を駆使して，米沢藩出身者の政府出仕から出世に尽力，平田東助・山下源太郎・池田成彬・小田切万寿之助らが雄飛して行った。